JCI

西宮と福島の絆

～姉妹締結の原点～

2つの巨大地震

阪神・淡路大震災

1995年1月17日5時46分52秒、淡路島北部沖の明石海峡を震源として、Mw6.9の兵庫県南部地震が発生し、兵庫県を中心に、近畿圏の広域が大きな被害を受けた。戦後に発生した地震災害・自然災害として、被害規模は東日本大震災が発生するまでは最悪のものであった。道路・鉄道・電気・水道・ガス・電話などのライフラインが寸断され、多大な影響を与えた。

阪急夙川駅（神戸新聞ＮＥＸＴより）

・死者：6,434名
・行方不明者：3名
・負傷者：43,792名
・避難人数（ピーク時）：約32万人
・住家被害：全壊104,906棟、半壊144,274棟
一部損壊390,506棟
・被害総額：約10兆円規模

地震直後に現地において、被災者支援のボランティア活動に参加した人の数は1日平均2万人超、3か月間で延べ117万人とも言われており、日本における「ボランティア元年」とも言われる。西宮青年会議所の活動エリアを直撃したが、会社や家庭がままならない状態の中、西宮青年会議所メンバーは地域の為に配給活動に奔走した。また、全国から青年会議所メンバーが集結し、泊まり込みで支援活動が行われた。

西宮市立中央体育館で避難する被災者を慰問される
天皇皇后両陛下（毎日新聞社より）

双葉町（jiji.comより）

浪江町請戸

東日本大震災

2011年3月11日午後2時46分18秒、東北地方太平洋沖地震が発生し、それに伴って津波が発生した。この津波によって福島第一原子力発電所事故が起こった。地震の規模はMw9.0で、発生時点において日本周辺における観測史上最大の地震である。

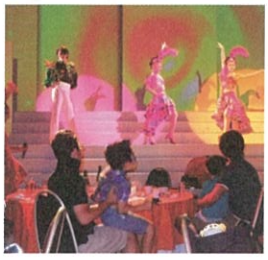
・死者：15,894名
・行方不明者：2,561名
・負傷者：6,152名
・避難人数（ピーク時）：約47万人
・住家被害：全壊121,805棟、半壊278,521棟
一部損壊746,146棟
・被害総額：約16～25兆円規模

この震災での犠牲者の死因のほとんどが、津波に巻き込まれたことによる水死であった。東日本大震災では広域かつ原子力災害による長期にわたる避難生活により、避難後に死亡する、震災関連死が高齢者を中心に相次いでいる。復興庁によると、2016年3月末時点での集計で3,472人が震災関連死に認定されている。

西宮青年会議所による浪江青年会議所、南双葉青年会議所に対しての復興支援への流れ

2011年3月11日に発生した東日本大震災による福島第一原子力発電所事故の影響で、社団法人浪江青年会議所と南双葉青年会議所の活動エリアの人々は、住み慣れたまちを離れ、避難することを余儀なくされていた。東日本大震災の被害の範囲は広く、甚大であったことから、復興には長期間かかることが予想され、特に原子力発電所事故の影響を大きく受ける当該地区においては他の被災地より復興に長い時間を要する可能性があった。

しかし、そんな状況にあっても、各会員会議所メンバーは明るい豊かな町への復興を目指して会員会議所存続を決意した。一方で、西宮青年会議所の歴史を振り返ってみると、1995年の阪神淡路大震災においては、全国の会員会議所メンバーに多大なる支援を受け、阪神大震災からの復興を実現できた。そこで、阪神大震災被災LOMとして、そして、チャーターLOMの宿命として、阪神淡路大震災の際の全国から受けたご厚志に報いる機会は今ここにあると確信し、西宮青年会議所は立ち上がった。



8月の合同家族例会

2012年8月18日には、日頃私たちを支えてくれている家族を招き、ユニバーサル・スタジオ・ジャパンにて3LOMの合同例会を開催した。日頃私たちを支えてくれている家族にJCの活動内容を知ってもらい、今後もJC活動に協力してもらうという目的に加えて、西宮青年会議所のメンバーにとっては、浪江青年会議所と南双葉青年会議所のメンバーと交流する事により、その想いに触れて、今後私達に何をする事が出来るか考える機会を作ることを目的として実施した。

メンバーやその家族を含む200名以上が参加し、親睦を深め、楽しい時間を家族と共に過ごすことができた。また、被災地両メンバーとその家族とのお話を通じ、いかに我々が恵まれた環境に気付かず当たり前のことへの感謝を忘れていたかを気づくことができた。

国内姉妹締結の調印式

2012年10月14日、日本青年会議所第61回全国会員大会北九州大会において、社団法人西宮青年会議所と社団法人浪江青年会議所、南双葉青年会議所との国内姉妹締結の調印式が行われた。これにより、正式に福島の2LOMと西宮青年会議所は姉妹LOMの関係となった。

国内姉妹締結証

社団法人浪江青年会議所で、南双葉青年会議所並びに社団法人西宮青年会議所は、JCI三信条の精神に則り、社会への奉仕 世界を結ぶ友情 会員相互の啓発を図り、三青年会議所の発展と相互の理解と友情を深め、更にはその発展を地域社会に及ぼし、三青年会議所の親善と友好の為に寄与することを誓い、ここに三青年会議所は、姉妹締結の誓いを結び、会員同志のもとに三青年会議所理事長は、LOM世代表し締結書に署名いたします。

2012年10月14日を姉妹締結記念日とする

立会人
公益社団法人日本青年会議所
第61代会頭
井川直樹

立会人
公益社団法人日本青年会議所 東北地区協議会
2012年度会長
植松 悟

立会人
公益社団法人日本青年会議所 近畿地区協議会
2012年度会長
平山伸吾

立会人
公益社団法人日本青年会議所 福島ブロック協議会
2012年度会長
斉藤 利昭

立会人
公益社団法人日本青年会議所 長崎ブロック協議会
2012年度会長
森 貴彦

社団法人浪江青年会議所
第30代理事長
石田全史

社団法人西宮青年会議所
第42代理事長
吉岡敬和

南双葉青年会議所
第20代理事長
三瓶健一郎

JCI
Junior Chamber International Japan

復興支援事業の振り返り

2013~2015

2013年11月9日（土）・10日（日）

「ふくしまの子供たちを甲子園に！プロジェクト」

「ふくしまの子供たちを甲子園に！プロジェクト」では、原発事故の影響で普段の野球ができなくなった福島の中学校球児30名を球児の夢である甲子園に招待した。そして、西宮からは復興特使として中学校球児4名を選抜し、事前に福島を訪問して相互の交流を深めた。交流を深めた福島と西宮の中学校球児は、広い甲子園のグランドで守備練習・打撃練習を生き生きと行った。練習後には紅白試合も行い、熱い戦いが繰り広げられた。その他、阪神タイガースOBの今岡誠氏による野球教室や、新井貴浩選手(当時)による講話などで阪神タイガースを代表する選手たちと直接触れ合うことができた。夢の甲子園でプレーした子供たちのはじける笑顔は今も忘れられない。

また、過去の甲子園を学べる歴史館や甲子園常連校が宿泊するやっこ旅館に宿泊し、たくさんの甲子園の歴史に触れたことで「自分も福島代表として甲子園に行くんだ」という熱い気持ちを語ってくれた中学生の言葉が何より印象に残った。今も、福島の球児たちとＪＣメンバー、西宮の復興特使との交流は続いている。

円陣を組んで「さあ、やるぞー」

ベンチからの応援も真剣そのもの

広い甲子園で集合写真、一生の記念です

憧れの新井選手とハイチーズ

3LOMの理事長も記念撮影

いよいよ始まる真剣勝負。子供達の目が輝いています！

今岡氏の野球教室は本当に勉強になりました

仲間となら、辛い道も乗り越えられる！

2014年8月19日（火）～21日（木）

「見て・聞いて・歩いて・ふれ合って～再興2014～」

「見て・聞いて・歩いて・ふれ合って～再興2014～」では、福島の子供たち27人と西宮の子供たち30人の合計57人が力をあわせてこれまで歩いたことのない長距離を一歩一歩踏みしめ、励ましあいながら六甲山を縦走した。道中が大変だった分、ゴールした瞬間の達成感はひとしおであった。

また、地滑り資料館や人と防災未来センターに行き、阪神淡路大震災の被災状況を改めて認識し、そこからどのように復興したのかも学んでもらった。

最終日にはキッザニア甲子園で職業体験も行い、働くことの大切さと楽しさも感じてもらった。

山中でつかの間の休息

資料館でのお勉強も真剣そのもの

キッザニアでの職業訓練。色んな職業が体験できて楽しかったな

炎の前で、団結を深めました！

最高の仲間と最高の景色で

2015年9月19日（土）～21日（月）

「福島からのRAINBOW～福島の魅力を発信～」

「福島からのRAINBOW～福島の魅力を発信～」では、福島と西宮で募集した小学生4年生～6年生の子供達と保護者を併せた18名と共に、いわき青年自然の家で宿泊。2日目には川内村のいわなの郷でキャンプを行った。

まず、小名浜港での現地海産物を使ったバーベキューでは、福島の食の安全と魅力の発信に貢献できた。また、観光船に乗り海から見る復興の様子を確認することもできた。

また、いわなの郷でのバーベキューでは、福島産の農作物や畜産物の魅力や安全を郷土料理作り体験などで改めて感じてもらい、その後のキャンプファイヤーでは、福島の伝統である甲冑等の登場もあった。

さらに、福島県の伝統工芸品作りやそば打ち体験なども体験し、子どもだけでなくその保護者とも交流を深め、改めて福島の魅力を味わい2世代に渡って関心を寄せることが出来た。こぞって「また行きたい！」と熱望の声が挙がり伝播性のある事業となった。

未来のＪＣマン

初めてのそば打ち体験

フェリーに乗り込む前に記念撮影

自然の中でお魚ＢＢＱ

山小屋の夕べ

新鮮な福島の海の幸、山の幸

2016年度の3LOM合同事業

開催日:2016年8月20日

2012年度 歴代3理事長による対談

西宮JC/吉岡政和 第62代理事長

［西宮JC］第62代理事長　吉岡政和氏

西宮青年会議所から「LOM TO LOM」の支援をしたいということで姉妹締結のお願いをした。あくまで、西宮青年会議所がやるべきは、地元のLOMを支援すること。市民を元気にするのは地元のLOMの役目なので、我々ができるのは、LOMの支援。一緒に飲み、時には騒ぎ、時には語り、今日を迎えた。今も姉妹を受け入れてくれた両LOMに感謝している。

南海トラフ大地震が起きたとき、次に助けられるのは西宮青年会議所。その時に傍に寄り添ってくれるのは浪江JC・南双葉JCだと確信している。そのためには、コミュニケーションを図り続けることが重要であって、事業ありきではない。

浪江JC/石田全史 第33代理事長

［浪江JC］第33代理事長　石田全史氏

負担になってきているのは感じる。もっと交流を進めていくことが必要ではないか。吉岡歴代とは、今でも毎月、交流をしている。現役メンバーが良好な関係を作ることが必要。

［南双葉JC］第25代、第28代理事長　三瓶健二郎氏

人と人との付き合いをしつつ、互いのLOMが繁栄することを目的に締結したはずであり、事業をすることに意義があると勘違いしてはいけない。
姉妹締結から5年目を迎え、南双葉ＪＣのメンバーも15名に増えた。これからも個人間のつながりを作って、幅広く、長くやっていきたい。

南双葉JC/三瓶健二郎 第25代、第28代理事長

次世代を担う3LOMのメンバーへのメッセージ　Message to the next generation

吉岡歴代理事長	青年会議所は機会を与える団体であり、その機会を一つでも多く得てほしい。西宮JCに入ってないと、福島の方と飲み交わすこともできなかった。小さな機会を大切にしてほしい。
石田歴代理事長	JCだと思わず、地域のために必要だと思って活動してほしい。JCだから会わなければならないではなく、人と人だから会うという意識を持ってほしい。そして、お互いの地域の価値観を共有してほしい。
三瓶歴代理事長	お互いに子供たちを集めて事業をするということは大変なことであり、家族例会のように、家族の交流を進めるのも一つだと思う。JCで出会ったとしても、人と人との付き合いと考えれば苦にならない。福島に来て、福島の再興の姿を一緒に見てほしい。それが我々の力になる。

現役３理事長による パネルディスカッション

【2016年度の3LOM合同事業実施の経緯】

自分は、姉妹締結後の2013年に入会しており、理事長を拝命した当初は姉妹締結の背景、経緯を十分には理解していなかった。自分と同じような境遇のメンバーも多いと思い、姉妹締結の経緯を振り返って、今後の3LOMのあり方を考える機会を持つことが重要だと思った。

（南双葉JC 木村聡 理事長）

南双葉JC/木村聡 理事長

【それぞれのまちの復興状況】

阪神大震災から20年以上が経過して、区画整理や建物の建て替え等の復興はできたといえる。しかし、地震前のコミュニティが失われ、孤独死の問題や再開発をした駅前ビルにテナントが入らない等の問題も抱えている。真の復興にはまだまだ時間がかかるということを痛感する。

（西宮JC 吉住正基 理事長）

浪江ＪＣの活動エリアは、現時点では居住できるのは葛尾村だけ。浪江ＪＣの活動も、いわき市などいろいろな場所で実施している。メンバーの移動時間の負担が非常に大きい。

（浪江JC 松井亮 理事長）

広野町、川内町、楢葉町が避難解除となり、来年4月には残る富岡町も避難解除となる予定だが、避難先での生活が定着していることもあり、なかなか戻ってこられないのが実情である。

（南双葉JC 木村聡 理事長）

浪江JC/松井亮 理事長

西宮JC/吉住正基 理事長

【今後の姉妹関係のあり方】

事業ありきではなく、交流の中から生まれる事業もある。交流をして懇親を深める中で事業が生まれるといい。今後、浪江町で大きな事業ができるようになったら、その時に人的支援等をしてもらえるとありがたい。

（浪江ＪＣ 松井亮 理事長）

今日の機会をきっかけとして、3LOMのメンバーからいろんなアイデアを出し合ってほしい。事業を通じて交流もできるし、何よりも負担に感じないような形で交流をすることが重要だと思う。

（南双葉ＪＣ 木村聡 理事長）

今後のあり方は、若いメンバーの自由な発想で楽しみながら行うのが良いと思う。西宮ＪＣとしては、支援をさせていただくという立場にあり、LOM to LOMの支援を通じて復興につなげられたら良いと思う。

（西宮ＪＣ 吉住正基 理事長）

2013年以降の震災復興支援事業の振り返り

〈2013年〉「ふくしまの子供たちを甲子園に！プロジェクト」

震災以降、いわき・浪江・南双葉青年会議所として事業ができなかった中、初めての胸躍る事業であった。

様々な、偶然と出会いによって達成できた事業で子供たちのはじける笑顔が印象的だった。

後日、保護者の方にお会いし話をさせていただく機会があった時に、保護者の方から子供が「高校に入って甲子園を目指したい」と言っていたと聞いて大変嬉しかった。

写真左：いわきJC／山崎建見 第9代理事長
写真中：浪江JC／広阪光広 第34代理事長
写真右：南双葉JC／神谷健二 第24代、第29代理事長

写真左：浪江JC／瀧真琴 副理事長
写真中：南双葉JC／小野田洋之 外部監事（第27代、第30代理事長）
写真右：西宮JC／藤田政信 監事

〈2014年〉「見て・聞いて・歩いて・ふれ合って～再興2014～」

2週間前にバスから飛行機に変更になるなど、西宮に連れて行くのは大変だったが、子供たちの目、考え方が変わった。

保護者からも子供が一回り大きくなったと感謝の言葉をいただいた。どこか被災者慣れしていた子供たちから自分達が支援するんだ、復興を担うんだという想いを聞けたのはよかった。

〈2015年〉「福島からのRAINBOW～福島の魅力を発信～」

参加条件を親子としたため、動員がまず大変だった。原発事故による風評被害がある中、西宮の子供たちとその保護者が福島で直接自然に触れ、新鮮な海産物を満喫した。親子の交流はもちろんのこと子供同士や保護者同士も交流を深めるなど幅広い交流ができた。

写真左：浪江JC／髙木徳行 直前理事長
写真中：南双葉JC／細山芳康 直前理事長
写真右：西宮JC／松本陽介 直前理事長

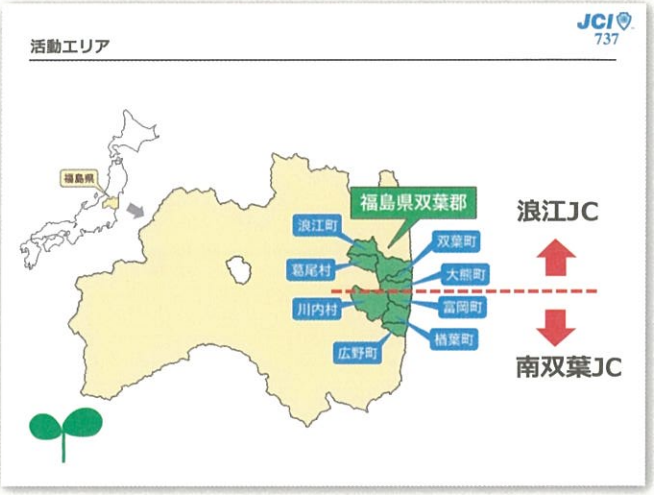
浪江JC・南双葉JCプレゼン

浪江青年会議所地域開発委員会近野悟史委員長及び、南双葉青年会議所名嘉陽一郎副理事長から、震災当時の被災状況やLOMの状況を福島の地図関係や西宮の比較に基づいて説明があった。

近野悟史 委員長

名嘉陽一郎 副理事長

浪江青年会議所資料



南双葉青年会議所資料

合同LOMナイト・合同懇親会

式典後の懇親会では、各理事長の挨拶のあと、LOMメンバー同士、親睦を深めた。2012年の8月度納涼例会でUSJに来られていたメンバーの顔もあり、「当時は大変であったが、納涼例会で元気づけられた。ＵＳＪの一部を貸し切っての例会には驚いた。」などと、懐かしい話で盛り上がった。

復興支援事業アンケート結果

来年以降、復興支援事業としてどのようなことをしたいと思いますか？

- LOMのメンバー同士の交流をメインとした事業。
- お互い負担にならず楽しくできること。
- その時によってニーズは変わると思うので協議をもとに考えたいと思う。
- 浪江、南双葉青年会議所が行う事業などへの支援。
- 防災意識を高める具体的な活動・事業。南海トラフ発災想定をしてLOMtoLOM支援をマニュアル化していくなど。
- まず、3LOMがもっと近づくべきだと思うので、懇親を深めるような設えをしても良いのでは。
- 事業する前に各LOMでの例会等で考えたりする時間がまず必要。

現地視察

視察日：2016年8月21日　参加人数：43人

浪江青年会議所・南双葉青年会議所のメンバーのアテンドのもと、浪江町、南双葉町の現状視察をした。今回初めて震災地を訪問するメンバーも多く、特に居住制限区域への訪問は西宮青年会議所のメンバーにとってとても貴重な機会となった。マイクロバス2台に分かれ、現地を視察した。車中では浪江、南双葉メンバーより詳しい説明も行われた。

No.	内容	視察ポイントなど
1	いわき市	常磐自動車道で浪江町へ
2	浪江町視察	コメ実証栽培田、中心市街地、浪江JC事務所、津波被災地
	浪江町→富岡町	国道6号で、双葉町、大熊町（福島第一原子力発電所立地町）を通って富岡町へ
3	富岡町視察	夜の森の桜並木（富岡駅は工事中の為視察不可）
4	楢葉町	天神岬スポーツ公園
5	昼食（広野町）	広野町　ホテル双葉邸
6	広野町	南双葉JC事務所、イオン広野店「ひろのてらす」

視察エリア拡大図

2 浪江青年会議所事務局

2 浪江町、双葉町視察 津波被災地（慰霊碑、共同墓地）

2 浪江町、双葉町視察 中心市街地（浪江駅前、浪江町役場）

3 富岡町視察 地元の名所である桜並木

4 楢葉町 天神岬スポーツ公園

6 広野町視察　南双葉青年会議所事務局

最後に

これまで復興支援事業を通して、福島と西宮の距離を縮め、姉妹ＬＯＭ同志の絆を深めてきた。
震災発生から5年が経過し、福島では日常生活を取り戻しつつある。
しかし、つぶすことすらできない廃墟、住んでいた家に戻れない地域がいまだに存在し、
震災の傷跡は消えない。また、国内を見渡すと、各地で災害は発生している。
だからこそ、ＬＯＭとしてだけでなく、1人の日本人として何をすべきかを考え続け、
行動に移さなければならない。
それは決して難しいことではない。その土地の生活やそこに暮らす人をイメージしてみよう。
この事業で出会った仲間同志で語り合うなど、できることはたくさんある。
1人でもいい。仲間と一緒でもいい。自らが熱源となり、次の一歩を踏み出そうではないか。

発 行　一般社団法人西宮青年会議所

企 画　一般社団法人西宮青年会議所研修委員会

監 修　一般社団法人浪江青年会議所、南双葉青年会議所

印 刷　ミニディア

2016年11月